

論 文

高等学校「古典・漢文」教材としての中国古典詩の活用

Use of Chinese Poems as "Classical Chinese" Material in Senior High School

中川 諭

Satoshi NAKAGAWA

キーワード：漢詩教材 漢文 古典 唐詩 楽府

一 はじめに

中国の古典文学において、「詩」は正統的な地位を保ってきた。古くはそもそも民謡であった古代歌謡が約三百篇選ばれ、儒教的解釈を伴って「詩経」という形で珍重され、現在まで伝わっている。六朝時代には貴族の間で詩が盛んに作られ、表現技術が大きく進歩し、洗練されていった。唐代に至ると、李白・杜甫をはじめとする優れた詩人が多数輩出し、あわせて近体詩の形式も確立され、中国古典詩の最隆盛期を迎えることになった。さらに中央官僚採用試験である科挙においても、作詩が試験問題として出題されていた。

このような中国の正統文学の一分野である「詩」は早くから我が国にも伝えられ、我が国の文学・文化に多大な影響を与えてきた。「古今和歌集」の仮名序は「詩経」(「毛詩」)の大序の影響があることは明らかであるし、「枕草子」や「源氏物語」といった平安文学の、あるいは日本古典の代表的作品の中には様々な形でその影響が見られる。中国古典詩すなわち「漢詩」は、中国の古典であると同時に、日本の古典の一つでもある。すなわち漢詩を学ぶことは、日本の古典の一

ジャンルを学ぶことなのである。

したがって高等学校の国語科の中に位置づけられている古典・漢文の中にも、漢詩が教材として取り上げられている。ではこの漢詩を用いて、「学習指導要領」における「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で述べられていることをどのように指導していけばいいのだろうか。高等学校の「国語科」における漢詩の意義について考えてみたい。

なお本稿で取り上げる高等学校国語の教科書は、以下のとおりである。

・国語総合

教育出版『新編国語総合 言葉の世界へ』

三省堂『明解国語総合』

第一学習社『高等学校国語総合』

大修館書店『新編国語総合』

筑摩書房『国語総合』

・古典または古典B

教育出版『新編古典B 言葉の世界へ』

三省堂「高等学校 古典漢文編」〔改訂版〕
 第一学習社「高等学校標準古典B」
 東京書籍「精選古典」

二 高等学校国語の教科書における漢詩教材の現状

各教科書にはどのような漢詩作品が取り上げられているのであろうか。各教科書に掲載される漢詩作品を概観して、漢詩教材の現状を確認しておきたい。各教科書で取り上げられている漢詩作品

教：教育出版、三：三省堂、第：第一学習社、大：大修館書店、筑：筑摩書房、東：東京書籍

時代	作者等	詩題	国語総合	古典
古代	詩経	子衿		第
古代	詩経	碩鼠		東
古代	詩経	陟岵		三
古代	詩経	桃夭		教三東
漢代	樂府	敕勒歌		三東
漢代	樂府	上邪		三東
漢代	古詩	行行重行行		教東
漢代	古詩	去者日以疎		東
漢代	古詩	生年不滿百		三
漢代	漢武帝	秋風辭		三
六朝	曹植	七步詩		第
六朝	陶潛	責子		東
六朝	陶潛	雜詩		第
六朝	陶潛	飲酒		教三東
初唐	王勃	杜少府之任蜀州		東
初唐	陳子昂	登幽州台歌		東
盛唐	韋應物	秋夜寄丘二十二員外		大筑東
盛唐	王維	九月九日憶山東兄弟		
盛唐	王維	鹿柴		教三第東
盛唐	王維	送元二使安西	教第大筑	
盛唐	王維	過香積寺		三

盛唐	王昌齡	芙蓉樓送辛漸		東
盛唐	王昌齡	從軍行		三
盛唐	孟浩然	宿建德江		東
盛唐	孟浩然	臨洞庭		第
盛唐	孟浩然	春曉	教筑	東
盛唐	孟浩然	過故人莊		東
盛唐	李白	怨情		東
盛唐	李白	月下獨酌		東
盛唐	李白	山中與幽人對酌	大	東
盛唐	李白	子夜吳歌		東
盛唐	李白	蛾眉山月歌		第
盛唐	李白	秋浦歌		東
盛唐	李白	送友人	筑	
盛唐	李白	把酒問月		三
盛唐	李白	靜夜思	三第筑	
盛唐	李白	早發白帝城	教	三
盛唐	李白	望廬山瀑布		教東
盛唐	李白	黃鶴樓送孟浩然之廣陵		第
盛唐	杜甫	月夜憶舍弟		東
盛唐	杜甫	石壕吏		東
盛唐	杜甫	旅夜書懷	教	
盛唐	杜甫	春望	三第	教
盛唐	杜甫	月夜	大第筑	
盛唐	杜甫	絕句	筑	第
盛唐	杜甫	登高		三東
盛唐	杜甫	兵車行		三東
盛唐	岑參	逢入京使		東
盛唐	王之渙	登鸛鶴樓	第	
盛唐	王之渙	涼州詞		教
盛唐	崔鶴樓	黃鶴樓		東
盛唐	王翰	涼州詞	三筑	
盛唐	錢起	送僧歸日本		東
中唐	韓愈	左遷至藍關示姪孫湘		三

中唐	白居易	草		東
中唐	白居易	香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁	三教	
中唐	白居易	長恨歌		三東
中唐	白居易	賣炭翁		教第
中唐	白居易	八月十五日夜、禁中獨直、對月憶元九	第東	三
中唐	柳宗元	江雪	教大第筑	三
中唐	張繼	楓橋夜泊		三東
中唐	孟郊	遊子吟		第東
中唐	于武陵	勸酒	三	
晚唐	杜牧	江南春	三第	
晚唐	杜牧	贈別	筑	東
晚唐	杜牧	山行	大	
晚唐	李商隱	夜雨寄北		東
晚唐	李商隱	登樂遊原		東
宋	王安石	鍾山即		東
宋	蘇軾	六月二十七日望湖樓醉書		東
宋	蘇軾	春夜	三第	
宋	陸游	遊山西村	三第東	
日本	大津皇子	五言、臨終一絶		東
日本	菅原道真	不出門	第	
日本	菅原道真	九月十日		教
日本	絶海中津	山家		東
日本	菅茶山	冬夜讀書		教三第
日本	頼山陽	泊天草洋		
日本	広瀬淡窓	桂林莊雜詠示諸生		教三東
日本	森鷗外	航西日記		三
日本	夏目漱石	題自畫		教三東
日本	正岡子規	送夏目漱石之伊予		三第

本稿で取り上げた「国語総合」・「古典」および「古典B」の教科書では、のべ八十二種類の作品が取り上げられている。その範囲は古代歌謡の「詩経」に収められている詩から漢代・魏晋南北朝・唐代そして宋代まで、広範囲の時代に渉る。その中でも唐代、とりわけ盛唐の作品が数多く採られており、特に李白と杜甫の作品が多い。中国の古典詩史では一般的に、盛唐の時代がピークと考えられてお

り、その中でも歴代李白と杜甫が最も高く評価されている。そのことからすると、盛唐の作品が中心、中でも李白と杜甫の作品がより多く採られているということでは、妥当であろう。また「古典」・「古典B」には大津皇子から夏目漱石・森鷗外まで、日本人の漢詩作品も採られている。これは「古典B」について「学習指導要領」で「教材には、日本漢文を含めること」と規定されていることによる。

作品別に見ると、柳宗元の「江雪」が五社の教科書に採用されているのを筆頭に、王維の「送元二之安西」と「鹿柴」が四社に採られ、その他陶潜の「飲酒」、李白の「静夜思」・「黃鶴樓送孟浩然之広陵」、杜甫の「春望」など比較的人口に膾炙している作品が多く採られている。その中で陸游「遊山西村」が、宋詩でありながら三社に採用されていることは興味を引く。また李白「早發白帝城」・杜甫「月夜」・杜甫「絶句」・白居易「八月十五日夜、禁中獨直、對月憶元九」・柳宗元「江雪」・杜牧「贈別」の六首は、「国語総合」の教科書に採られていることあれば、「古典」の教科書に採られている場合もある。しかし一つの教科書会社で「国語総合」と「古典」両方で取っている例はない。これら六首の詩はいずれも有名でかつ平易であるので、「国語総合」で取り上げても構わない作品だと思われる。「古典」で取り上げる場合は、レベルに合わせた工夫をして、「国語総合」とは違った授業展開ができる教材であろう。

その一方で、王之涣「登鸛鶴樓」や崔顥「黃鶴樓」のような比較的よく知られている作品が、一社にしか採られていないのは意外に思えた。また三省堂と東京書籍の二社は楽府を二種、それも「上邪」と「敕勒歌」という同じ作品を採っている。(高校における古典漢文の教材としての楽府の意義については後述する。)

三、教科書の違いによる、訓読の違い

二社以上の教科書に採られている詩は、教科書が異なってもその読み方(訓読)は同じなのであろうか。それとも教科書ごとに異なった読み方をしているのであろうか。

複数の会社の教科書に取り上げられている詩の訓読を比べてみると、会社によって多少の違いが見られる。たとえば陶潜の「飲酒」詩は教育出版・三省堂・東京書籍の三社に採られている。そしてその第二句目「而無車馬喧」の「喧」字を、教育出版と三省堂は「かまびす(しき)」、東京書籍は「かしま(しき)」と読んでいる。第七句目「山氣日夕佳」の「佳」字を、教育出版は「か(なり)」

三省堂・東京書籍は「よ（く）」と読んでいる。また第九句目「此中有真意」の「此中」を、教育出版・三省堂は「こ（の）なか（に）」と読み、東京書籍は「此中」「二文字で「こ（に）」と読んでいる。これらは読み方が多少違うものの、詩の意味のとらえ方としては違いはない。それぞれの教科書会社（そして編纂者）の個性の範囲とすることができよう。

王維の「送元二使安西」は教育出版・第一学習社・大修館書店・筑摩書房の四社に採られている。その四句目「西出陽関無故人」の「出陽関」を、教育出版・第一学習社・筑摩書房の三社は「ようかん（を）い（づれば）」と読んでいるが、大修館書店のみ「ようかん（を）い（でなば）」と読んでいる。この読み方の違いについて、塚田勝郎氏は『新人教師のための漢文指導入門講座』において、次のように述べる。

「出陽関」は「陽関を出でなば」とも「陽関を出づれば」とも訓読されます。伝統的には「陽関を出づれば」と訓読されることが多いようですが、高校生が古文の時間に教わる文法に則して考えると、「已然形（出づれば）」では、「陽関を出たところ」（偶然条件）、「陽関を出たので」（原因・理由）、「陽関を出るといつも」（恒常条件）と訳すことになり、矛盾を生じます。その意味では、「未然形（な）＋ば」の仮定条件を意識した「陽関を出でなば」に説得力があります。ただし、漢文の訓読では「已然形＋ば」で仮定条件を表すことも多く、必ずしも文語文法と一致しない点があることを承知しておきましょう。

塚田氏が述べるとおり、古文の授業との連携を考えれば「出でなば」と読んだ方がよいが、高等学校で学習する古典文法とは少々異なっても伝統的な読み方が訓読の口調に合っている場合もある。指導者（授業者）がこのことを十分に理解した上で指導すれば、教科書としてはどちらの読み方を採用しても構わないであろう。

もう一つ類似の例を挙げてみよう。王維の「鹿柴」である。この詩は教育出版・三省堂・第一学習社・東京書籍の四社の教科書に採用されている。そしてその読み方は各社多少異なっている。まず原文を挙げてみる。（各社により違いがあるため、返り点・送り仮名は省略する。）

空山不見人
但聞人語響
返景入深林
復照青苔上

各社とも詩の本文に文字の異同はない。そしてこの二句目を、各社それぞれ次のように読んでいる。

教育出版・但達人語の響くを聞くのみ

三省堂・但達人語の響きを聞くのみ

第一学習社・但だ聞く人語の響くを

東京書籍・但達人語の響き聞こゆ

第一学習社のみ動詞「聞」を賓語（目的語）「人語響」より先に読んでいます。いわゆる「倒置」の読み方であるが、詩であることを考慮すれば、特に問題とする必要はあるまい。

限定を表す副詞「但（ただ）」に呼応する副助詞「のみ」を送っているのは、教育出版と三省堂の二社に限られている。高等学校で学習する古典文法を念頭に置けば、ここはやはり副助詞「のみ」を送った方がいかもしれない。とはいえないずれの読み方でも詩の意味や理解に大きな影響を与えるものではなく、これも各社の個性の範囲としていいだろう。

もう一つ大きな違いは「聞」の読み方である。教育出版・第一学習社・三省堂の三社は「聞く」と読んでいるが、東京書籍のみ「聞こゆ」と読んでいます。ここは、「静まりかえった奥山に人の気配はないが（空山不見人）、ただ人の話声だけが聞こえてくる（但聞人語響）」の意味である。よって古文で学習する内容を踏まえると、「聞く」と読むよりも「聞こゆ」と読んだ方が適切であろう。しかし伝統的な漢文訓読としては「聞く」と読んだ方が単純明快でふさわしいかもしれない。これも先の「送元二使安西」詩第四句目と同様に、漢文の一般的・伝統的な訓読と古文の授業で学習する古典文法と少々異なる点であろう。

古文も漢文も「国語科」の中の古典の一分野であることを考慮すれば、古文で学習する内容と漢文で学習する内容は、一致させることが望ましい。そして原則

として各社の教科書もその方針で編集されていよう。その一方でここに示したように、古文と漢文の学習内容に多少の齟齬が生じることもある。この点はしっかりと留意して指導する必要がある。

もう一つ、教科書によって読み方が異なる例を挙げてみよう。三省堂と東京書籍の二社に採用されている楽府詩「上邪」である。原文は次のようになっている。

上邪

我欲与君相知

長命無絶衰

山無陵

江水为竭

冬雷震震

夏雨雪

天地合

乃敢与君绝

三省堂と東京書籍で本文の文字の異同はない。この詩を東京書籍は次のように読んでいる。

上邪 我君と(与)相(あひ)知り 長命まで絶え衰ふること無からんと欲す

山陵無く 江(かは)水竭(つ)くるを為し

冬に雷(いかづち)震震(しんしん)として 夏に雪雨(ふ)り

天地合するとき 乃(すなは)ち敢(あへ)て君と(与)絶たん

一方三省堂の読み方は次のようになっている。

上邪 我君と(与)相知り 長命絶え衰ふること無からんと欲す

山陵(をか)無く 江水為(ため)に竭(つ)き

冬雷震震として 夏に雪雨(ふ)り

天地合すれば 乃(すなは)ち君と(与)絶たん

両者を比べると、五句目「江水為竭」を除いて、多少の違いはあるものの詩の意味を左右するほどの大きな読み方の差はない。ただ「江水為竭」だけは、両社で読み方が大きく異なっている。もしかしたら、伝統的・一般的なこの詩の訓読のしかたとしては、三省堂の読み方の方なかもしれない。しかしこれは、先の「送元二使安西」・「鹿柴」の二つの例とは少々異なり、単に読み方の習慣の違いに過ぎないとするわけにはいかないようだ。

「江水為竭」を「江水 竭くるを為(な)し」と読むか、「江水 為(ため)に竭き」と読むかで、この句の意味が変わってくる。すなわち「江水為に竭き」では「(山に高い部分がなくなつたために)川の水が涸れ」という意味になる。一方「江水竭くるを為す」と読めば、「山の高いところがなくなつてしまふ」という現象と並んで、「川の水が涸れてしまふ」という現象が起こるといふ意味になる。では本来この詩はどちらの意味なのであろうか。

まずこの詩の意味から考えるべきであろう。しかしどちらの読み方でも意味は通じそうだ。高等学校の学習範囲で判定するのはいささか難しい。

そこで、高等学校の学習内容、「学習指導要領」に記載される範囲を超えてしまふが、中国語の専門的立場から考えてみたい。

まず音韻・声調の面から考えてみる。「為」という字は二つの読み方がある。すなわち、平声音と去声音である。平声音であれば「なし」、去声音であれば「ために」と読むことになる。ではどちらで読むべきなのか。

近体詩であれば押韻・平仄に厳密な決まりがあり、句中の平仄もその規則からある程度は判定できる。しかし「上邪」は楽府詩である。平仄に関して厳密な決まりがあるわけではないので、平仄の配列の観点から「江水為竭」の「為」が平声なのか去声なのかを判定することはできない。ただ中国語のリズムの観点からすると、次のように考えられまいか。「江」は平声、「水」は上声、「竭」は入声である。もし「為」を去声で読めば、「江水為竭」の平仄は「平仄仄仄」となり、仄声が三つ続くことになる。一方「為」字を平声音で読めば、「江水為竭」の平仄は「平仄平仄」となり、バランスのとれた平仄の配列になってリズムもよくなる。近体詩のように厳密な平仄の配列を求めない楽府詩であるとはいえず、楽府詩も韻文、歌謡である。そもそも民間に伝わっていた民謡だ。口調の良さ、リズム感は重要な要素であろう。だとすると平仄の配列のバランスがとれた読み方、「為」字を平声音に読む読み方の方がふさわしいのではないだろうか。中国語の

リズムからすれば、東京書籍のように「江水為竭」は「江水 竭くるを為す」と読んだ方がいいのかもしれない。

次に文学評論の面から考えてみる。楽府詩「上邪」について、歴代いくつもの論評がある。その中で、王先謙は『漢鏡歌釈文箋正』の中で次のように述べている。

五者皆必無之事、則我之不能絶君明矣。

五つのことは絶対にあり得ないこと、だとしたら私があなた(君)から離れられないのは明らかである。

王先謙が言う「五者」とは、「山が崩れてなくなる」と・「川の水が涸れ果てること」・「冬に雷がゴロゴロと鳴ること」・「夏に雪が降ること」・「天と地が合体してしまふこと」の五つであることは間違いない。そして王先謙はこの五つを同等のレベルとしてとらえている。もし「上邪」の五句目「江水為竭」の「為」字を「ために」と読むと、四句目と五句目は「山が崩れてなくなったために、川の水が涸れてしまった」という意味になる。すなわち四句目の「山無陵」が五句目「江水為竭」の原因となり、そこに因果関係が成立して、四句目と五句目が一体のことになってしまう。そうすると王先謙が「五者」と述べていることは合わなくなってしまう。王先謙は五句目の「為」字は平声音の意味で理解しているであろう。

さらに、張玉穀『古詩賞析』巻五では次のように述べている。

首三正説意言已尽、後五反面竭力申説。如此、然後敢絶、是終不可絶也。豊用五事、兩就地維説、兩就天時説、直説到天地混合、一氣趕落、不見堆垛、局奇筆橫。

最初の三句で詩の趣旨と言葉は尽きている。次の五句で別の面から力を尽くして述べる。このようにして後、断絶することがないと言う。五つの事柄を続けて用いており、二つは「地」について述べ、二つは「天」について述べ、天地が混合することを直言し、一気に進んで滞りなく、筆が縦横無尽に走っている。

張玉穀は王先謙同様、やはり五つの事柄が連続して述べられていると理解している。そしてさらに最初の二つが「地」のこと、次の二つが「天」のこと、そして「天と地が合体する」と、その構成を分析する。「冬に雷が鳴ること」と「夏に雪が降ること」に因果関係が認められない以上、「山が崩れること」と「川が涸れること」にも因果関係を認めない方が正しい読み方ではないかと思われる。これに従えば、「江水為竭」の「為」字は「ために」という意味で理解しない方が、本来の中国語で書かれた作品としては正しいということになるのではないだろうか。そうすると、「江水為竭」の訓読は、東京書籍のように「江水 竭くるを為し」と読む方がより適切であるということになる。おそらく三省堂は旧来の一般的な訓読の仕方を採用したのである。

「上邪」詩は楽府詩としては短編であり、内容も比較的容易で、高校生にとってもわかりやすいものである。その点では高等学校の古典・漢文の教材としてはふさわしいかもしれない。しかしその一方で、上述のようにその読み方に教科書間で違いが見られ、それは単に読み慣わしの違いではない。高校生が複数の教科書を比較する機会ほとんどないかもしれないが、授業者は教材研究の段階でこの問題に遭遇することになるだろう。そしてこの問題の解決には中国学の専門的手順を踏まなければならない。そうすると「上邪」のような詩は高等学校の漢文教材としては、筆者としては積極的に用いることには躊躇してしまふ。

これはもちろん、楽府詩が高等学校の漢文の教材としてふさわしくない、ということではない。楽府詩には近体詩にはない素朴さがある。中国の古典詩が必ずしも五言または七言だけではないことを理解するには格好の教材であろう。また白居易の新楽府を取り上げる教科書も多数ある。新楽府との対応で、楽府詩を学習するのは決して悪いことではない。楽府詩でも「陌上桑」や「焦仲卿妻」のような長編は、ストーリー性もあって作品としては面白いけれども、実際は授業時間数の関係上取り上げづらいだろう。しかし短編の楽府詩であれば、そしてその訓読の仕方に大きな問題のある作品でなければ、高等学校で学習する教材としては有意義な点も多いのではないだろうか。

四、漢詩を用いた教育実践に向けて

「漢詩」以外に高等学校の漢文の教材として取り上げられるジャンルには、史伝(「十八史略」・「史記」など)や散文(唐宋八家文など)・思想的文章(「論

語・「孟子」・諸子百家など)がある。「漢詩」はこれらのジャンルとどのような違い・特徴があるのだろうか。そこに「漢詩」教材の持つ意味・「漢詩」学習の意義があるのだろうか。

では「漢詩」の他のジャンルとは違う特徴とは何か。

- (1) 多くの詩で一句の長さが五文字(五言詩)または七文字(七言詩)。(楽府詩を除く)
- (2) 一篇の長さが比較的短い。
- (3) 対句表現が多用される。律詩では必須となる。
- (4) 押韻がある。
- (5) 散文に比べて凝縮された表現が用いられる。

見た目など容易に判断できるものとしては、このような点が挙げられよう。これらの特徴は、漢文の学習にどのように生かすことができるだろうか。

(1)・(2)は、初修段階の返り点・送り仮名そして書き下し文の練習に適切ではないかと考える。各社の「国語総合」の教科書は、漢文単元の最初のところで訓読の決まりの説明した後、比較的短い文章を利用して返り点・送り仮名・書き下し文の練習問題載せている。しかし初めて漢文に触れる生徒に漢文訓読の決まりを理解させるには、必ずしも十分な分量とは言えない。やはり指導者による追加の練習問題が必要になってくるであろう。その際漢詩は適切な材料となるのではないかと。返り点・送り仮名が付けられた漢詩の本文を書き下し文に直させる、逆に白文と書き下し文を示して返り点と送り仮名をつけさせるといふ練習問題は、漢詩を用いれば容易に作成できる。一句が五文字または七文字と短いことから、複雑な返り点はほとんど出てこない。初修段階の学習教材としてはふさわしいだろう。指導者の側としても、漢詩であれば「国語総合」・「古典」の教科書には必ず載っているし、また様々な解説書・参考書も出版されている。練習問題作成のための材料も容易に集めることができるのではないだろうか。

「対句」は文章表現における修辭法のひとつである。日本語の文章でも、詩をはじめとする文学的文章に用いられることが多い。しかし漢字仮名交じりの日本語の文章で「対句」を説明するのは意外と難しい。漢字表記と仮名表記が混在する上、文字数が異なることも多いと、「対句」の概念を理解するのも難しいであろう。ところが漢字ばかりが並ぶ漢文(中国語)であれば、単語(文字)の対応が分かりやすい。授業者としても説明しやすいし、生徒も理解しやすいのではな

いか。さらに律詩には必ず対句が用いられているのだから、教材を探すのも容易である。漢文教材、特に漢詩教材で対句の概念を学習した後、現代文や古文における「対句」へと発展していけば、日本語における「対句」についても円滑に理解することができるのではないだろうか。

「詩」に限らず、中国の古典韻文は必ず押韻する。そして高等学校の教科書では、漢詩単元では多かれ少なかれ各社教科書とも押韻の説明を掲載している。対句表現同様、漢字が並ぶ漢詩教材だからこそ、和文の歌や散文を用いるよりも「押韻」そして「韻を踏むこと」の説明はしやすい。しかし漢詩における韻はもとも中国語音で踏んでいるのだから、漢文訓読では全く分からなくなってしまう。押韻について指導するには漢文訓読から離れて、音読み(漢音)にして説明しなければならぬ。十分な教材研究に基づく工夫が必要になる。一つの方法として、絶句のように短い詩の中国語音での読み方(授業者による朗読または音声データ)を一、二回生徒に聞かせるのもよいのではないかと考える。漢文訓読では分かりづらいリズムが理解できるのではないかと。その上で押韻を漢音に基づいて指導すれば、訓読を離れて音読みで考えなければならないことも理解しやすくなるのではないだろうか。そしてこれは、「我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深める」ことに繋がっていくと思う。

漢詩は当然ながら一篇の作品の文字数が少ない。近体詩に限れば、一番長い七言律詩^①でも五十六字、五言絶句に至ってはわずか二十字である。そのわずかな字数の中に詩人はさまざまな感情・状況を織り込んでいる。それだけ凝縮された表現がなされているということである。さらに典故を用いることも多い。このことは読解が難しくなるということであり、生徒の学習の妨げになりかねない。授業者には十分な教材研究が求められるよう。

しかしこれは、もちろん「古典B」の段階での学習になるであろうが、生徒に詩の世界を考えさせるに適切な教材とすることができるのではないかと。教科書に付けられている注釈や授業者からのヒントに基づきながら、詩の言おうとしていることを考える。生徒のレベルに応じて個人学習でもグループ学習でも構わない。生徒自身に詩の世界を考えさせることから、課題の設定の仕方によっては、アクティブラーニング型の学習に応用できるかもしれない。

五 結び

以上、高等学校の古典・漢文における漢詩教材について、その現状における問題点を指摘し、そして漢詩を用いた漢文の授業のあり方を考えてきた。膨大な作品が伝わっている中国古典詩の中で、高等学校の漢文教材として何を選ぶべきなのか、これは極めて重要な問題であろう。どの漢詩を教えるのかと同時に、漢詩で何を教えるのかという点を十分に考慮した上で教材を選定すべきである。その際中国文学の専門的研究レベルで様々な問題が残っているような作品は、やはり選ぶべきではないだろう。

本稿では漢詩教材に限定して考察を進めてきた。全般的な考察になったために、個別作品の具体的な授業計画までは及ぶことができなかった。さらに、漢詩以外の散文や史伝・思想的文章についても、その特質を考えた教材の選定や学習内容も当然あるはずである。これらについても稿を改めて考えていきたい。

注

(1) 中国文学の研究論文では通常「陶淵明」の名前を用いることが多い。しかし高等学校の教科書では「陶潜」の名を用いることが多いので、本稿においても「陶潜」の名を用いることにする。

(2) 村上哲見氏は「蘇軾・陸游」(村上哲見・浅見洋二著、角川書店)の中で、「乾道二年に職を免ぜられて帰郷したのは、彼の官途における最初の挫折であった。(中略)それから一年も経ってはいないのに、この詩にはそうした挫折によるショックのようなものはや微塵も感じられない。すでにのびのびと農村の生活を楽しむ心境になりきっており、だからこそこの名作が生まれたのである。」と述べる。この詩は詩人としての陸游の転機となった代表作の一つであるならば、三社の教科書に採用されているのも妥当なところであろう。

(3) 「敕勒歌」の「敕」字を三省堂の教科書では「勅」に作る。「勅」と「勅」は旧字と常用漢字の関係であり、基本的にはどちらでも問題はない。なお未本『樂府詩集』(中国国家図書館蔵本、一九五五年文学古籍出版社影印本)では、「敕」に作る。

(4) 大修館書店、二〇一四年。第三章「漢文指導の実践(教材篇)」の「漢詩の授業に向けて」。

(5) 岡田正之著「文章規範・古詩賞析」(富山房 漢文大系18)では、三省堂のように

「江水為(ため)に竭き」と読んでいる。

(6) 三省堂『高等学校古典漢文編』に付けられた注。

(7) 同治十一年、長沙王氏虚受堂刊本。東洋文庫蔵。

(8) 民国十四年蘇州振新書社刊本。大東文化大学図書館蔵。

(9) 注(5)前掲書では、臣下が君主に忠誠を述べる詩であると解釈する。

(10) 『学習指導要領』第2章「各学科に共通する各教科」第2款「各科目」第6「古典B」2「内容」。

(11) 高校の教科書では取り扱わない排律は除く。